

音を使った対比学習の基礎と応用

肝 付 文 子

Aiding Children's Learning by Comparing and Contrasting Sounds -Basic and Advanced Skills

KIMOTSUKI Fumiko

はじめに

子供は、目に見たり、触ったりすることで様々な物事を知る。そして、親が話す言語で、物事を指す単語を覚える。そして、さらに、感情が発達するに従い、感情を言葉で表現することも覚える。これらが次第に1つの線につながるようになり、「物事を知る→その状態を理解する→そのイメージを言葉で表現する」という風に、子供は、階段を一段ずつ上がるように、ゆっくりと、確実に、知識と感情を結び付けていく。1つ物事を知ることで、知識を増やすだけでなく、心も成長させる。

しかし、「物事を知る」「状態を理解する」という、いわば「事実」の部分が省略され、「心の中で芽生えるイメージ」のみが真実とされ、個人の感情によって全く違う世界が繰り広げられる「音楽」というものに出会った時、子供達はどのような反応を示すのか、その音楽を、子供達に対し指導する立場にある者は、どのような姿勢で音楽を扱うべきであり、一体音楽の何を子供達に伝えるべきであるのか、音楽教育の立場から考察をしてみようと思う。

I 子供の対比による学習の考察

子供にとって、最も身近に存在するのが、両親である。両親と接する中で、子供はそのうち

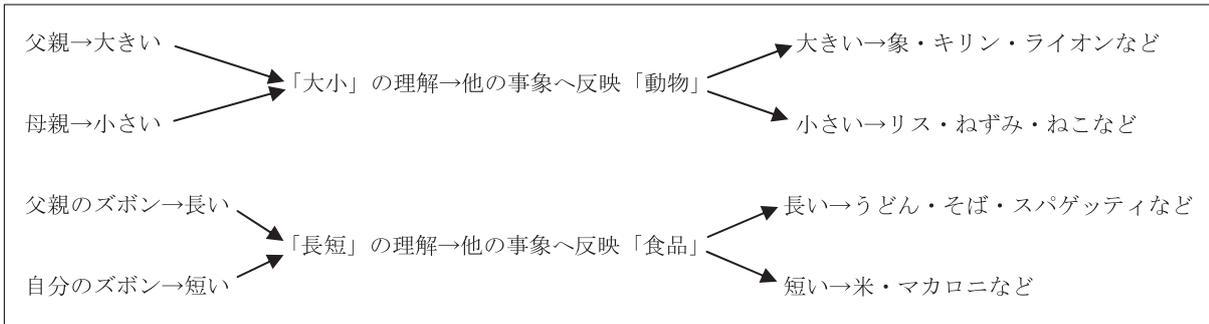
の1人を父親、もう1人を母親という存在として認識するようになる。そして、その存在を示す単語（この場合「お父さん」「お母さん」）を、両親の使う言葉で理解し、記憶する。次の段階として、目に見える「お父さん」と「お母さん」を比較することで、「大きい」「小さい」という、その状態を形容する対比の世界を認識し始める。両親の手のひら、足などを比べ、大きさの違いを知る。親も、「お父さんは大きいから、力持ちだね。」「お母さんは、お父さんより小さいから、高い戸棚に手が届かないね。」など、日常的に言葉で対比を表現するだろう。また、自分自身と親とを比べることによっても、大きさの違いを認識する。自分と親の体や、持ち物（靴や洋服など）を見比べて、大小を理解する。

家の中の身近な物事を通して「大小」の概念が把握できると、外の世界の物事も、同じ概念で認識しようとする。例えば、直接目にしたり、映像や書物で見たりして、様々な動物を知ると、次に「動物」というカテゴリーを「大小」の概念の中で分別し、大量に入り込んだ動物に関する情報や知識を整理しようとする。象やキリン、ライオンなどは「大きい」というグループに所属させ、リスやねずみ、ねこなどを「小さい」というグループに所属させる。このように分類することで、「動物」という世界をより整理して理解しようとするわけである。(図1参照) このように、対比した世界で物事を分類し、整理すること

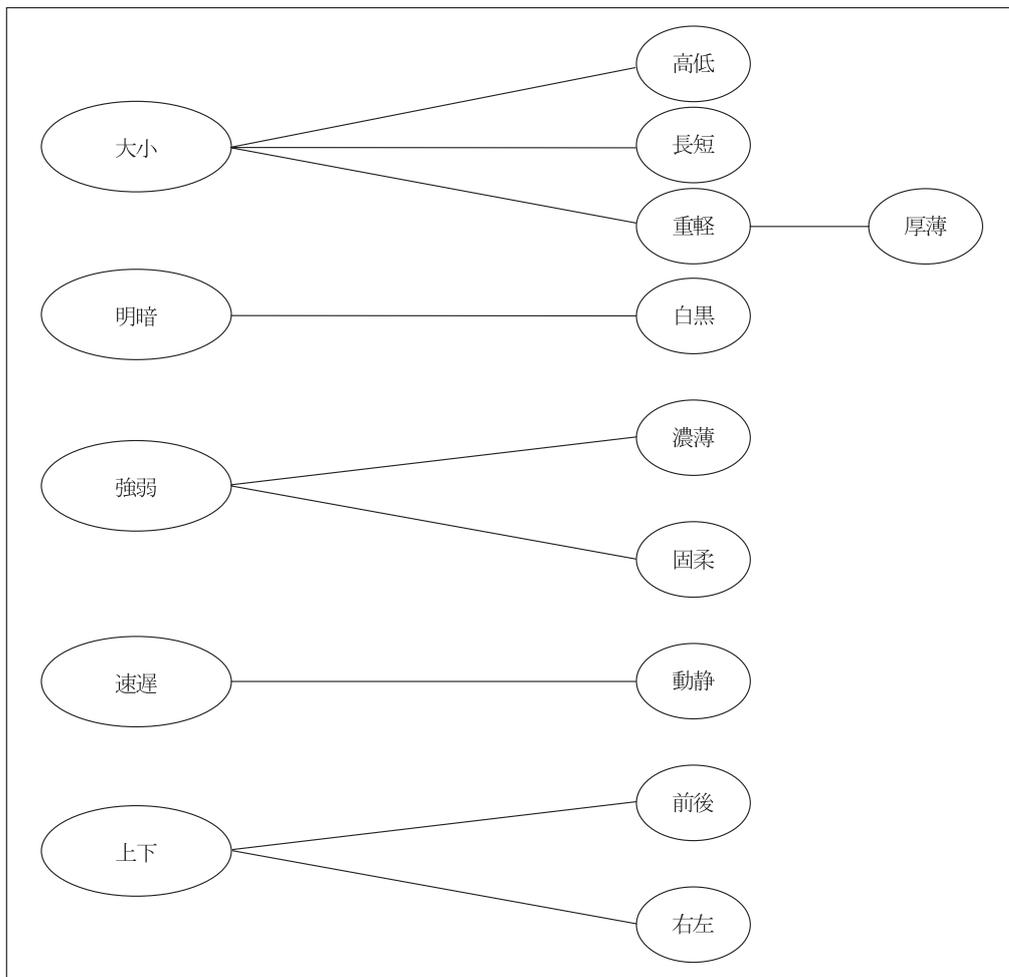
は、物事の理解を一気に深まらせ、知識の数を急増させる。また、物事の状態を形容する対比の内容自体も、知識の拡大に比例する形で増加していく。図2で示したように、「大小」という対比の概念から発展し、「高低」「長短」「重軽」という

ように、対比の世界はより細分化し、具体化していく。このように、知識を得、それを整理するという作業を、人間は常に繰り返し行いながら成長する。

(図1)



(図2)



そして、興味深いことは、この対比の概念をさらに発展させ、子供は次の段階として「感情をあてはめていく」ということである。これは、それまでに得た知識が、多くの人間によって同様に認識されるものに対し、非常に個人差があるものである。例えば、「大きい」というグループに所属させた動物に対して、「怖い」という感情を持つ子供もいるが、一方で、「優しい」「強い」「格好いい」という感情を持つ子供もいる。また、「小さい」というグループに所属させた動物に対して、「かわいい」という感情を持つ子供もいる一方で、「怖い」という感情を持つ子供もいる。このように、多くの物事やその状態の情報を得る段階としては、多くの人間の共通の認識＝事実として知識を蓄えるが、そのものから受ける印象、感情というものは、個人的なものであり、個人が本来持つ性格や実体験によって、大きな差が生まれるといえる。

Ⅱ 対比による学習と音楽との関連

1. 音素材による実験実施

それでは、聴力によって得た情報はどうか。視覚的に捉えた情報は、多くの人間によって同様に認識されたり、もしくは多くの人間に似たような印象を与えたりする場合が多い。しかし、耳から入ってきた情報は、人によって認識や印象が大きく変わる。人生経験が少なく、固定概念が確立していない子供の場合、その個人差はより顕著となる。その認識や印象の個人差を検証するために、次のような実験を行った。実験は、対比する2つの音素材をピアノ演奏で子供達に聴かせ、その対比の様子や状態をイメージする言葉（形容詞）を、カードの中から選択してもらい、子供のもつ音へのイメージを、一定の条件下で探ろうというものである。実験の条件は下記のとおりである。

- 調査する子供は、4～7歳の男女計20名である。(男=9名 女=11名)
- 対比する2つの音素材は、AからFの6パタ

ーンとする。(図3) 1小節目と2小節目の音が対比している。

- 音素材をイメージする言葉のカードは、ひらがなで提示するが、読めない子供には言葉で質問する。(表1)
- 音素材を聴き、なるべく間をおかず、直感で回答してもらう。

(表1) 対比する音素材をイメージする言葉(形容詞)

① 大きい ⇔ 小さい	② 長い ⇔ 短い
③ 高い ⇔ 低い	④ 明るい ⇔ 暗い
⑤ 強い ⇔ 弱い	⑥ 速い ⇔ 遅い
⑦ 太い ⇔ 細い	⑧ 重い ⇔ 軽い

2. 実験に対する回答予想と実際の回答結果

これに対し、予想される回答を準備する。音楽の専門家でない大人が、これらの音素材を聞き、判断すると考えられる最も一般的、平均的な回答を、回答例として示す。その回答例に対する根拠を解説し、子供達への実験を行う際に注目すべき点を記す。(表2)

(表2) 予想される回答

	回答例	考 察
A	高低	同じ2つの和音を、音域のみを変えて演奏するために、必然的に音域の違いが顕著に聴こえる。その違いを、子供は音域の「高低」として捉えるのかに注目したい。
	重軽	同じ2つの和音(5重音)であるが、ピアノでの低音域での密集和音は、かなり重厚な響きを感じられる。その重厚感が子供の耳にどのような印象で入るのかが注目すべき点である。
B	高低	オクターブ重音を広い音域差で演奏した場合、高音域の甲高さと低音域の落ち着いた響きが、顕著な違いとして聴こえる。それを子供が音の「高低」と認識するのかに注目したい。
C	長短	音価の違いを表現する。4拍のばす単音と、短くはねる単音が、リズムの違いとして聴こえると予想される。子供が音の「長短」という音価の違いとして聴くのかを注目したい。
D	速遅	順次進行の短い音素材を、速度を変えて演奏する。唯一メロディックな要素を含んだ素材だが、子供がどのように感じるか、リズム変化を聞き取れるかどうか注目点である。
E	明暗	長三和音と短三和音を1つずつ提示する。たくさん音楽を聴きながら大人は、音楽的知識がなくとも、旋律やリズム、和音、調性の特長を「明るい音楽」「暗い音楽」という感覚で捉えることが多い。これは、「楽しい」「嬉しい」「悲しい」「せつない」などという経験に基づく感情を音楽に結び付けて、音楽のイメージを感情的に作り上げているといえる。子供が、感情を音楽に結び付けてイメージを作るのか、という点が非常に興味深い。
F	強弱	同じ2つの和音を、強弱を変えて演奏する。フォルテ(f)とピアノ(pp)の差をつけて演奏した場合、その強さの変化が最も印象的に聴こえる。それを「強さの違い」として子供が認識するのかに注目したい。

(図3) 音素材AからF

The figure displays six musical examples, labeled A through F, each consisting of a two-staff piano score in common time (C). The examples are as follows:

- A:** Treble clef has a whole note chord of G4, B4, D5. Bass clef has a whole note chord of G2, B1, D2.
- B:** Treble clef has a whole note G4. Bass clef has a whole note G2.
- C:** Treble clef has a whole note G4. Bass clef has a whole rest.
- D:** Treble clef has a quarter note G4, quarter note A4, quarter note B4, quarter note C5, quarter rest, quarter rest. Bass clef has a whole rest.
- E:** Treble clef has a whole note chord of G4, B4, D5. Bass clef has a whole rest.
- F:** Treble clef has a whole note chord of G4, B4, D5 with dynamic *f*. Bass clef has a whole note chord of G2, B1, D2. The second measure shows a whole note chord of G4, B4, D5 with dynamic *pp* in the treble and a whole note chord of G2, B1, D2 in the bass.

(表3) 実際の回答

A	高低	重軽	明暗	強弱	大小
B	重軽	高低	明暗	大小	
C	大小	長短	太細	速遅	
D	速遅	重軽	長短		
E	明暗	重軽	高低		
F	大小	強弱	重軽		

Ⅲ 実験結果からの考察

1. 個性教育

上の結果のように、対比する音素材を子供に聴かせ、その対比のイメージを、限定した8つの対比を意味する言葉で表現させた場合、1つの音素材に対し、複数の回答を引き出すことができた。しかし、対比の言葉を8種類と限定せずに、「自由な言葉の表現で」という条件にすれば、さらに多くの回答を得ることができたに違いない。

これは、物事の状態に関する情報を、対比の世界を利用して分類することで、知識を増やし、整理する作業とは異なり、「音素材」という情報を、感じるままにイメージし、後から対比の世界にあてはめていくという工程となる。この非常に個人的な判断に、正誤は存在しない。そこに残る答えは、まさに「個性」そのものである。

音楽は、目に見えず、瞬時に生まれ消えていく曖昧な存在であり、一定の形を長時間残さない。そのため、人間は、わずか一瞬耳を通り過ぎた音という情報を、音が通り過ぎるその瞬間に心に触れる感覚で判断する。音楽を感じるということは、非常に不安定で、曖昧で、かつ個人的なものである。この「個人的なもの」という特長が「個

性」といえるのであれば、それこそ、音楽を通して、子供達に伝えることができる重要な内容ではないだろうか。そしてまた、子供の個性を引き出すたくさんの教育方針が存在する中で、音楽にしか担うことができない独特の個性教育が展開できるのではないかと考えられる。

2. 個性を伸ばす自己表現

個性教育の重要性が謳われて久しい現代社会であるが、個性教育を実際に開始する前に、子供自身に「個性」というものは何なのかを知ってもらい必要があるだろう。そして、それは誰の中にも存在するごく自然なものである、ということを理解してもらい、各人の感情が重要になるという、1人1人の存在意義を伝えなくてはならない。そのために、非常に個性的な回答を得ることができた上の実験結果(表3)を利用し、音楽表現の実践へとさらに発展させていきたい。実践の方法は下記の通りを行う。

- ①音素材を聴いてイメージした対比の言葉を表1の中からカードで選ぶ。
- ②その内容を、カードの単語をそのまま読むのではなく、身体を使って表現する。

②の「身体で表現する」という内容の一部例を、対比の項目によってわけて挙げる。(表4)

この実践により、「大」と判断した子供は身体を大きく上に伸ばすような動きを行い、「明」と判断した子供はきらきらと手を動かす動きを行うなど、同じ音素材に対し、周囲の友達がそれぞれ異なる動きをすることを、子供自身が間近に見

(表4)

大小	つま先をたて、身体を上大きく伸ばし、両手を頭の上しっかりと伸ばし、両手で円を作る地面にうづくまるような格好で、できる限り身体を小さくする
高低	立った姿勢のまま、両手をまっすぐに上にあげる 立った姿勢のまま、両手を下に下ろす
速遅	与えられた空間の中を、駆け足で走る 与えられた空間の中を、ゆっくりと歩く
長短	一定の場所からスタートして、スタート地点からなるべく遠くに走り、停止する 一定の場所からスタートして、スタート地点に近い場所まで走り、停止する
明暗	両手を高くかかげ、手を左右にふって「きらきら」と星のような動きをする 両手のひらを胸にあて、頭もさげる

ることができる。共通の情報から、たくさんの表現内容が存在することを実際に目で見て、子供は、「個性」という世界を具体的に認識することができる。また、その多様な表現内容の中で、自分自身が表現したものはいかなるものなのか、自分自身の感じていることを、よりの確に表現できているのかどうかなど、他人の表現を見ることで自分自身を振り返ることも、個性の探求においては重要なことである。

この際に指導者が十分に注意しなければならないことは、どの子供の表現、意見も否定してはならないということである。正誤が存在しないことを前提として、子供の中から表現される全てを肯定し、温かく受け止めることが最も重要である。指導者の側が、そのように寛容で、正誤の判断を下さずに、多くの子供の表現を肯定的に受け止めていくことで、子供達は、その指導者の姿勢から、自然と自己が受け入れられる喜びや感謝と、他を受け止める寛容さを学び、吸収していく。

このように、1人1人の存在に価値があることを知ることは、さらに自分という存在を掘り下げて知ろう、感じよう、という、人間の成長に不可欠な「欲求」「好奇心」を育てることにもつながっていくだろう。また、自分の個性を模索することを通して、他人もまた唯一無二の存在なのだということを、実感するに違いない。

3. 判断に対する根拠の模索

2つの音素材を聴いて感じた対比の様子（大小や長短など）を、身体を使って表現することで、自分自身や、他人の個性を実感できたことであろう。

指導者は、次にその個々の判断に対する「根拠」を尋ねるべきである。これについては、下の表5の調査結果を参考にしたい。この調査は、音素材を聴いて、その対比の様子を、8種類の対比を形容する言葉（表1）から選択してもらう実験を行った際、その回答の根拠を個々に質問したものである。実験に参加した20名全員に質問をしたが、ここでは特に印象に残った回答を一部列挙

する。

この調査結果から、子供達は、「山」「空」「地面」「蛇」「かえる」「お父さん」「お母さん」「太陽」「月」「風船ガム」「かみなり」「象」「リス」などのように、音素材を聴いて、何か別の具体的な事象をイメージして、そのイメージをもとに、対比の世界と結び付けているがことがわかる。また、そこからさらに「怖い」「優しい」「びっくりする」「寂しい」「痛い」などのように、より具体的な感情も感じている。これらの回答は、どれも非常に個人的であると同時に、大人の固定概念では感じることでできない感性によるものであることが見て取れる。

このことより、ほんの短い音素材であったとしても、「音楽」というもの自体が、鋭い感性を持つ子供達にとっては、無限の解釈の許される自由な存在である事実を垣間見ることができた。音楽が子供の個性を引き出し、またその逆に、子供が音楽の自由な部分を求めるという、相互作用のような効果も期待できる。

子供が、心を十分に開放する場所として音楽を利用することができるのであれば、音楽は、保育や教育活動の中で、幅広く、自由に、かつ有効に活用することができる、発展の可能性を大きく秘めたものであるに間違いない。

IV 音楽を活用した新たな指導案の模索

1. 固定概念からの脱出

音楽が、大人の常識感覚から大きく外れた、子供独特の感性やイメージを引き出せるものであるとすれば、その音楽を取り扱う大人（指導者）が、どのように子供達と音楽とを結びつけるか、どのような音楽を子供達に聴かせ、どのように音楽体験させるべきかなどを熟考することが必要である。

まず、その前提として、大人の感性によって判断された、いわゆる「良い音楽」だけを提供することは、正しい判断とは言えないであろう。多くの大人は、一般的に音楽から「美しさ」や「安らぎ」を求め、それは、具体的には「聴いていて

(表5)
素材A

高低	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノの高い音と低い音が聞こえた ・山の頂上と、山の下の部分みたいだった ・空と地面みたいに聞こえた
重軽	<ul style="list-style-type: none"> ・後の方の音は、とても重い本を持って運んでいるようだった ・同じように聞こえたけど、後の方の音は大きな重い石が落ちてきて、怖いような感じがした
明暗	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音は太陽のような響きだったけど、後の音は、夜のような感じがした
強弱	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音が強い感じで、後の音は弱い感じがした ・最初の音は弱弱い響きで、後の音は強くて怒っているみたいだった
大小	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音が小さくて、後の音は大きく聞こえた ・後の音を聞いたら、大きな音でびっくりしたから、最初の方は小さいのだと思った

素材B

重軽	<ul style="list-style-type: none"> ・先生がピアノの左のほうで弾いたのは、重そうな感じだったけど、右のほうに手をやって弾いた音は軽い感じでやさしい音だと思った
高低	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノの高い音になる場所と、低い音になる場所で、先生が弾きわけていた ・山の上の方と下の方みたいに違っていた ・よくわからないけど、とても高い音と、とても低い音のような感じがした ・家の1階から、階段を上がって2階に行ったみたいだった
明暗	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音はとても暗くて、怖い音だと思ったけど、後の音は明るくてキラキラした音に聞こえた
大小	<ul style="list-style-type: none"> ・大きい音がしたと思ったら、次の音は小さい音だった ・最初の大きい音がお父さんみたいで、後の小さい音がお母さんみたいだった

素材C

大小	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな象と小さなリスが歩いているようだった ・布団で寝そべっている大きなお父さんと、跳ねて遊んでいる小さい子供（自分）だと思った
長短	<ul style="list-style-type: none"> ・長い音符と短い音符に聞こえた ・蛇みたいな音とかえるみたいな音だった ・風船ガムを長く伸ばして、パチンと短くきれちゃったみたいだった
太細	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音は細い音で、急に太くなったように聞こえた ・最初の音は太い音で、後の音は細いたよりない感じだった
速遅	<ul style="list-style-type: none"> ・最初は遅い音で時間が止まったみたいで、後の音で急に時計が動いた感じだった

素材D

速遅	<ul style="list-style-type: none"> ・リスが素早く動いている音と、亀がのんびり歩いている音みたいだった ・速いメロディーと、同じメロディーだけど遅く弾いているのだと思った ・最初の音は速くて聞こうと思ったら終わってしまったけど、後の方はゆっくりだったのでちゃんと落ち着いて聞けるなあ、と思った
重軽	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音は、先生が軽々しく弾いているなと思ったけど、後の音は、何だか手におもりがついてるみたいに弾いているような気がした
長短	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音はすぐに終わったので短いなと思った。後の音は、同じ音みたいだったけど長く感じた

素材E

明暗	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音は太陽で、後の音は月だと思った ・最初の音はよくピアノで聞くような音だと思ったけど、後の音は何だか暗くてピアノに合っていないような寂しそうな音に聞こえた
重軽	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音が軽い音で晴れの日みたいで、後の音は重い音で雨が降っている音のように聞こえた
高低	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音は高いところから穴をのぞきこんでいる感じで、後の音は、下から空に向かって穴をのぞきこんでいるみたいだった

素材F

大小	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音は大きくてびっくりした。後の音は急に小さくなった ・大きい音はかみなりが近い感じで、小さな音はかみなりが遠い感じに聞こえた
強弱	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音はとても強くて、後の音は弱い音だと思った ・先生が強くピアノをたたいたから「強い」と思った。次の音は弱くピアノを弾いたから「弱い」のだと思った
重軽	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の音は、先生が弾いた後、ピアノが重くて痛いのではないかと思った。後の音は、軽くて優しい感じだったので、ピアノは痛くなかったな、と思った

安心できる音色」ということとなる。そのため、「聴きなれた楽曲」「親しみのある楽曲」が特に多く求められる傾向が見られる。このことから、子供にも、大人が美しいと感じる音楽を聴かせることになりがちであるが、子供が、大人同様にその音楽を求め、同じように感銘を受けるとは限らない。

モーツァルトやバッハなどの世界的な名曲を聴かせても全く興味を示さない子供が、効果音ばかりが目立つテレビコマーシャルの音に興味を持ったり、そのような音楽ばかりをすぐに記憶して、真似てみたりすることがある。この場合、子供の興味が、「音楽の美しさ」にはないことは明らかである。音楽が、自分の生活の中の身近な何かを想像させたり、自分の感情を強く刺激したりする場合、子供は音楽に強く引き込まれていく。音楽に対して大人が求める安らぎではなく、日常泣いたり笑ったりする激しい喜怒哀楽といった、より劇的で、日常的な強い感情こそが、音への関心とつながっているのである。

そのため、クラシック音楽や童謡が、子供の情緒の成長のために良いものであるだろうという判断により、そればかり一生懸命子供に聴かせる親もいるが、それだけが、子供にとって適切な音楽との接し方とは言い難い。もちろん、そのような音楽を聴かせる体験は非常に有意義である。しかし、これらのいわゆる「美しい音楽」というものを子供にも感じさせたいと思う場合、それを聴かせようとする親自身が、心から美しいと感じ、感動し、親しみを感じていなければならない。音楽の美しさを感じ入る大人の態度を通して、子供もまた、「美しい」という概念に触れ、知ることができるからである。教育のために良いものであると本に書いてあるから、もしくは誰かが言っていたから聴かせてみよう、という冷めた態度では、「美」という世界を実感した経験のない子供は、それが本当に美しいものかどうかを判断することができない。

そこで、子供が求め、子供の刺激となる音楽を提供しようとするれば、前にも述べたように大人の

固定概念から大きく外れた、子供独特の感性を引き出せる音の世界を模索する必要がある。その例として考えられる種類の音楽の1つが、「現代音楽」である。

2. 現代音楽と子供の感性

現代においては、現代音楽といわれる音楽に対しては、極端に相反する意見がもたれている。音楽家の中でも、現代音楽演奏を好んで取り組む演奏家がいる一方で、古典音楽を専門とし、近代や現代音楽の響きや奏法に対し嫌悪感すら抱いている演奏家もいる。作曲家や指揮者は、音楽を専門とする者の中でも、前衛といわれる世界に強い興味を持つ存在である。彼らは、過去に存在しなかった音世界の表現を追及し、その演奏を実現させようという強い欲求を常に持っている。しかし、その新しい音楽への情熱と探求が過熱し、一般聴衆や演奏家の求める音楽の方向性と違ってしまい、作曲家—演奏家—聴衆という音楽を織り成す人間関係の間に大きな温度差を生んでしまっていることは事実である。

立場によって、その理解や興味に大きな温度差のある、非常に複雑な構造をもつ現代音楽の世界であるが、子供にとってみると、それは一転して単なる「音遊び」というおもちゃのような存在になってしまう。美しい旋律、美しく整った和声を持つ伴奏、耳に心地よい調性という、我々大人にとって決定的な「美」を放つ楽曲と、無旋律、無伴奏、無調という、大人にとっては聴きづらいと感じることも多い現代音楽の楽曲との間に、子供は大きな境界線をひかない。どちらも、自分自身の感情の刺激となり、想像力をかきたてられる音であれば、それは「おもしろい」「楽しい」ものとなるのである。

子供の心を刺激するためにも、私はこの現代音楽の利用は、非常に有効ではないかと考えている。

現代音楽は、ただじっくりと、子供達に長時間聴かせるような視聴体験をさせてみても、子供の心に響くような大きな効果は全く期待できないと思われる。短い音素材を聴かせ、何をイメージす

るかを自由に発言させる、イメージできる内容を指導者がいくつか指定しそこから選択させる、イメージしたものを身体を使って表現するなどして、子供の「音遊び」の世界を幅広く展開させていくような使い方、現代音楽を用いることが、最も

効果的であるだろう。

下に、その現代音楽的な音素材を利用した実習指導案を示す。

3. 指導事例と実践についての詳細

(図4) 譜例

音素材A

Musical score for Piano, labeled '音素材A'. It features a treble and bass clef in common time (C). The treble staff contains a sequence of eighth notes with various accidentals (sharps, naturals, flats) and rests. The bass staff contains a sequence of quarter notes and rests.

音素材B

Musical score for Piano, labeled '音素材B'. It features a treble and bass clef in 3/4 time with a key signature of one sharp (F#). The treble staff contains a sequence of eighth notes and quarter notes with various accidentals and rests. The bass staff contains rests.

音素材C

Musical score for Piano, labeled '音素材C'. It features a treble and bass clef in common time (C). The treble staff contains a sequence of eighth notes with various accidentals and rests, followed by chords with accents. The bass staff contains a sequence of quarter notes and rests.

音素材の特徴

A 半音による順次進行と跳躍進行の混合。跳躍進行は、へ音記号で書かれたパート全てと3小節目のト音記号のパートが該当する。へ音記号のパートでは、四分音符と八分音符（四分音符の縮小形）のリズム変化で、同じパッセージを表現する。音素材は、短く反復する特長があり、全体的に八分音符のリズムの滑らかなラインで支配されている。

B 2音重音を連打する音素材と、八分音符の単音C音に休符をはさみながら連打する音素材とが、1小節ごと交互に登場する。ピアノを打楽器的に扱い、太鼓をたたくようにリズム打ちを行う音素材である。

C AやBの素材よりも速い動きのパッセージが登場し、聴く側には顕著に耳に入ってくるが、全体を通しては、十六分音符・四分音符・二分音符と、音価の異なる音符が配置されている。

下の実習案をさらに発展させ、音楽を聴いた後のイメージの発表を、絵画などで表現させることも非常に有意義である。自分自身がイメージしたものを、時間をかけて、形の残るものに表現することで、より自分自身の感覚や感情を探求したり、確認したりすることができる。また、他の人の制作したものと、自分のものとを比較することによって、互いの個性を認め合い、互いの存在を尊重するような心の動きを促すことができる。イメー

(資料1) 実習指導案1

題 材	○△□の音遊び	4～6歳
ねらい 内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽をしっかりと聴いて、音の世界に集中する。 ・音を感じて、イメージを作り上げることで敏感な感性を養う。 ・イメージした内容をきちんと言葉で表現し、自己探求を行う。 	
幼児の活動	指 導 内 容	留 意 点
<p>● 図形を知る ○△□の3つの図形を覚える</p>	<p>・「まる、さんかく、しかくの形を見てみましょう」 紙に大きく書かれた3つの図形（○△□）を見せる。ボードに記入したり、紐などを使用したりした図形でも良い。ペープサートのような各図形の札を作成して見せても良い。</p> <p>・「まる、さんかく、しかくのことを考えてみましょう」 生活の中に存在するこれら3つの図形の形を持ったものを、子供達に考えてもらい、それぞれの意見を発表してもらう。（例：○＝タイヤ、ドーナツ、なべ、コップなど。△＝家の屋根、開いた傘、おでんのはんぺん、サンドイッチなど。□＝窓、テレビ、食パンなど）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは、図形自体を目で確認させ、名称をしっかりと伝える。 ・大きな声で、自分の考えをきちんと言葉に発表できるように促す。なるべく多くの子供を指名し、多くの意見を集める。
<p>● 音楽を聴く 先生が演奏する音楽を聴く</p>	<p>・「これから先生がピアノで演奏する音楽を、聴いてみましょう」 あらかじめ準備してあった3つの音楽をピアノで演奏する。（図4 譜例 音素材ABC）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・集中力が欠けたり、クラスがざわついたりする場合には、目を閉じるように指導し、静寂の中で集中するように促す。
<p>● 音楽からイメージする 聴いた音楽に対して指定された条件の中でイメージを膨らませる</p>	<p>・「音楽を聴いて、どの音楽が○の音楽か、△の音楽か、□の音楽かを決めてみましょう」 イメージの条件を提示した上で、再度、音楽を演奏し、子供達に聴かせる。 次に1曲ずつ演奏をする。</p> <p>・（音素材A演奏後）「この音楽が○だと思う人？」＝挙手 「△だと思う人？」＝挙手 「□だと思う人？」＝挙手 音素材Aを演奏したら、上のような問いかけをして、子供達に挙手を促す。</p> <p>・「どうしてそう思いましたか？」 それぞれの回答の根拠について、指名して、言葉で発表をさせる。</p> <p>*音素材B、Cについても同様に行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他の友達と違った意見でも、堂々と挙手して自己表現ができるような雰囲気作りを行う。 ・なるべく多くの子供に発言の機会を与える。子供から出た意見に対し、否定的なコメントをしないことを徹底する。

ジの表現方法には、下記のような方法を例として挙げる。

(表6) ○△□のイメージの表現

表現方法	内容の詳細	留意点
絵画で表現	<p>1. 紙に実際にイメージした○△□を描く</p> <p>2. イメージしたそれぞれの図形を基に自由な絵画制作を行う 先に図形を描き、その図形の中、周辺などのスペースもうまく利用して絵画制作を続けさせる。</p>	<p>選択するクレヨンなどの色は、自由であることが望ましい。</p> <p>紙をいっぱい使用するよう促し、自由に描かせる。</p>
工作で表現	<p>1. 紙に、ひもや糸を使って○△□を形作る 紙の上に、図形の形にのりを塗っておいて、その上にひもを貼っていく。できあがったら、取れないように上からテープなどで補強する。</p>	<p>ひもや、のり、テープなどの扱いの上手下手、得手不得手には個人差や月齢差があるため、1人1人の動きをよくみて、指導者が的確にサポートする。</p>
身体を使って表現	<p>1. 大きな○△□の指定された枠に入る すべての実習に入る前に、広い空間があれば、あらかじめ大きな図形の枠を作っておく。ひもや縄跳びを使用して、多くの子供が入れる大きさの、3種類の図形の枠を作り、音楽を聴いて、イメージした図形の枠の中に入る。それぞれ小ぶりの大きさのものを複数準備して、どれかに入る形式でも良い。</p>	<p>子供達が走って一斉に同じ枠に密集する場合を想定し、枠の大きさや3種類の枠を設置する間隔を考慮する。けがなどの事故を避けるように、配慮する。</p>

4. 指導案に必要な音素材の創作方法

このような音楽は、決して有名な現代作曲家の作曲した楽曲を使用する必要はない。子供が音遊びとして戯れる感覚と同じような感覚で、指導者が簡単に創作する方が好ましい。幼稚園や保育園においては、多くの楽曲を歌ったり合奏したりするが、それらの演奏を指導者自身が苦手とするような場合でも、この「音遊び」感覚で扱うことのできる音楽であれば、苦手意識を感じることなく、気軽に、音楽を通しての保育や教育活動に自信を持って、積極的に取り組むことができると考えられる。

無旋律、無伴奏、無調性という音楽を「音遊び」として音楽活動に取り入れる場合、提示する音楽をどのような活動内容に結び付けるのか、音楽をどのように創作するのかという2点に注意して実習指導案を練ることが必要である。まずは、どのような活動内容にしていくのか、という問題であるが、これは、これまでに述べてきている通り、子供の自由な発想を引き出すための音楽であるべきことから、音楽に触れた子供の感想を表現

できる内容にすることが最も望ましいと考えられる。例としては、次のような表現活動例を挙げることができる。

音楽を聴いた上で

1. 感じたことやイメージした内容を、言葉で表現する。
2. 感じたことや、イメージした内容を、身体を使って表現する。(「犬」をイメージした場合、自分自身が犬になって歩いたり、吠えたりするなどの表現)
3. 指導者によって指定された条件付きの事象から、自分のイメージできるものを選択する(実習指導案1の『○△□の音遊び』のようなプログラムや対比の世界でイメージさせるプログラムなど)
4. 最もイメージしやすい色で表現する(赤、白、紫、黒などでの表現)

このような、非常に個性を重要視した活動内容は、音楽の中でも特に現代音楽のようなジャンルに適している。音楽を提供する指導者側も、それ

を受ける生徒である子供の側も、唯一である「正しい回答」を求めないし、固定概念や一定のイメージ、既存の美意識などに囚われる必要がない。このように心が開放され、どんな解釈や発想も許される活動内容や学びの時間が園の中にあるということも、また必要なことであるに違いない。

実際にどのような形で創作をすれば良いかであるが、これも難しく考えることではない。現代音楽を無旋律、無伴奏、無調性という環境の中で考えると、音楽の条件が自由になりすぎてしまい、かえって複雑に考えてしまいがちであるが、図4の音素材の特長として解説で示したとおり、ある一定の音楽のルールを自分自身の中であらかじめ設定しておくことで、非常に簡単に創作することができる。次に、設定するルールの例をいくつか示す。

1. 低音域と高音域のみの対比音を鳴らす（複数音、単音の両方可能）
2. ピアノの鍵盤上で、音を選択せず、打楽器的に指でたたいてリズムを発生させる
3. 一定の和音やパッセージを先に設定し、それをいろんな音域やリズムで演奏する
4. 黒鍵と白鍵をわけて、対比音として鳴らす

このように、創作する音楽の中に一定のルールを作り、その条件の範囲内でのみ音楽を発展させる方法で、「音遊び」のように音を紡いでいきながら、音楽を創作することができる。

他の人の耳に、どのように響かなければならない、どのように演奏しなくてはならない、演奏でミスタッチがあってはいけないなど、音楽を扱い、発信する側の心に常につきまとう心配も、このような種類の音楽であれば、発生しなくなる。音楽を発信する者、指導する者、それを受ける者すべてが、固定概念から開放され、「回答が1つではない」という自由さを存分に楽しむことで、音楽活動が有意義なものとなると考えられる。

まとめ

子供が、日々社会の一員としての知識や感性を身につけながら成長する中で、物事を分類整理して理解したり、言葉の発達を助けたりするために無意識のうちに行う「対比」による学習を、ここでは音楽に応用した場合にどのような効果が生じるかを考察してきた。「音」という世界を、他の物事を学ぶ時に有効である「対比」というカテゴリーで分類したり、判断したりしようとした場合、子供1人1人の感性によって、感じ方に大きな違いが生じ、解釈が様々であることが見え、これこそが、人の感性を刺激する音楽の本来あるべき姿であり、また音楽に求められるべき姿であるのではないかと、改めて痛感させられる。

個人の個性の重要性が教育の現場でも久しく謳われていながら、現実の日本社会においては、十分に個性を発揮することの許される場面は、残念ながら非常に少ないと感じられる。これは、欧米社会と比較した場合、社会構造や民族性の根本的な違いから考えても明らかであり、同時に地理的、歴史的環境から影響を受けた日本人の精神性を考えた場合、このような社会が構築されてきたことも必然といえるかもしれない。しかし、一生の中で、自分自身という唯一無二の存在を最大限に活かすという「個性の発揮」が、一見相反すると感じられる「社会生活における協調性」に並んで、バランスよく保たれ、時と場面によって十分に使い分けられることが、人生においては本来必要であるだろう。

日本人が得意とする協調性を子供達に十分に伝えつつ、日本人が比較的苦手とする「個性」を発見し、伸ばし、活かすという教育の一部を、音楽が担うことは、十分にできるであろう。そして、個性教育としての音楽を、扱い指導する者自身が、独創的で自由な発想、音楽観を持ち、子供達に影響を受けながら日々成長していくことが、何よりも必要であるだろう。

真の意味での「個性教育の重要性」が何である

のか、子供達をどこへ導くべきであるのかなどのビジョンを明確に描くことのできる指導者が多く育ち、豊かで、独創的な音楽教育が、広く展開されていくことを願わずにはいられない。

参考文献

1. 中島紀子・横松友義編著『保育指導法の研究』ミネルヴァ書房 2007.3.20 第1章1～3
2. 小田豊・神長美津子（編）『新たな幼稚園教育の展開 幼児教育の充実に向けて』東洋館出版 2007.7 第1部、第2部
3. 有馬幼稚園・小学校 執筆・監修秋田喜代美『幼少連携のカリキュラムづくりと実践事例』小学館 2002.3.20 全般参考
4. 無藤隆著『幼児教育の原則 保育内容を徹底的に考える』ミネルヴァ書房 2009.10.20 第6、7章
5. 浜野政雄監修『音楽教育の研究』（理論と実践の統一をめざして）音楽之友社 1999.9 第1、10章
6. 板野平・溝上日出夫監修 全日本リトミック音楽教育研究会編『ダルクローズ・システムによるリトミック指導1（3才児用）』全音楽譜出版社 1983年 pp2-4「まえがき」
7. 板野平・溝上日出夫監修 全日本リトミック音楽教育研究会編『ダルクローズ・システムによるリトミック指導2（4才児用）』全音楽譜出版社 1983年 pp2-4「リズムとは」
8. 板野平・溝上日出夫監修 全日本リトミック音楽教育研究会編『ダルクローズ・システムによるリトミック指導3（5才児用）』全音楽譜出版社 1983年 pp2-4「リトミック指導の展開」
9. エリザベス・バンドゥレスパー著 石丸由理訳『ダルクローズのリトミック』ドレミ出版 2002.1.30 PP9-26「序章」「第1章リトミック教育の理論」「第2章リトミック教育における基本原理」
10. 相澤保正・伊藤嘉子・木村博子・児玉裕子・澤田直子・田中常雄・松原靖子・吉野幸男『幼児音楽教育の基礎 あたらしい音楽表現』音楽之友社 2005.1.31 p28, p32, p38, p42, p56, p76（譜面参照）
11. 八木正一著『たのしい音楽授業の作り方』音楽之友社 2002.5.31 pp62-75
12. 坪能由紀子著『音楽づくりのアイデア』音楽之友社 2002.8.31 pp8-19

（東萌保育専門学校非常勤講師 肝付文子）